

夏目漱石『行人』論

栞 畑 朱 里

はじめに

夏目漱石『行人』は「東京朝日新聞」「大阪朝日新聞」に一九二二（大正元）年十二月六日から一九二三（大正二）年四月七日まで連載、漱石の胃潰瘍再発と 神経衰弱 のため、約五ヶ月の休載を経て、一九二三（大正二）年九月一八日から連載を再開し、一月一五日に連載を終えた。その後、一九二四（大正三）年一月七日に大倉書店から初刊本『行人』が発行された。

先行研究では、新聞連載の途中に約五ヶ月の中断があつたことを踏まえ、特に「塵勞」の章を作品の構成の上での「分裂」ととる論が多く見られる。また、江藤淳のように『行人』のテーマを「我執」の主題の追究」とすることで一郎を物語の中心に据え、作品を読み解こうとする論も多く見られる。そのような状況の中で、小宮

豊隆が「観察者としての位置に立つてゐる」と定めた二郎の立場を見直す動きも現れた。橋本佳は二郎から直への恋心があつたことを、一郎との対話を避けようとする二郎の行動を論拠として次のように論じている。

二郎が一郎から何回催促されても、和歌山の報告をついにしなかつたのは、報告する材料がなかつたからではなくて、和歌山での行動が、一郎の前で正直には語り得ぬような種類のものだったからである。⁵⁾

伊豆利彦はさらに、二郎の語りの時制に着目し、二郎が語る 現在 において、二郎の直への気持ちが一郎を狂気にかりたてていると述べている。⁶⁾ これらの論に対して山尾仁子は、二郎は「既に一郎の妻となつたお直を嫂としてより外に見ていない」⁷⁾と述べ、二郎にとって直は恋愛の対象になりえなかつたはずだと論じている。二郎の直への思慕についての論争からも分かるように、当初、一郎の苦悩に焦点を当て、「観察者」や狂言回しとしてしか注目されなかつた二郎についてどのように捉えるかといった論が多く提出されている。有名なのは、重松泰雄がいわゆる「二郎説話」は直と二郎の恋愛問題のみでなく、「嫂に近づくことによつて」二郎は一郎の孤独に近付き、「一郎説話」の重要な「前提」となっていると論じたものである。⁸⁾

また、近年着目されている「行人」読解への視点の一つとして、二郎による語りについての論が展開されてきた。佐藤泉は、「行人」の時制の不一致に着目し、構成や主題がそのために「捩れ」と指摘している。⁹⁾ その他にも、「行人」の構想の転換を指摘する論など、作品内におけるテーマの連続性や非連続性に着目しながら多くの論が提出されてきた。

ここで着目したいのは、先行研究でも示されているように、二郎が「行人」の地の文において視点人物である

にも関わらず、直に恋慕しているかどうかをある程度 どのようにも読める ように語っていることである。二郎は、自らが見聞きした情報を統合することはしない。そのうえ、情報をまとめ、「現在」の彼の立場から物事や人物を評価することも殆どない。視点人物であるにも関わらず、二郎は「語る」ことを避けているようにも思われる。本論では、本来「解る」はずの立場である二郎はなぜ「解らない」と語っているのかという問題に触れながら、先行研究ではあまり分析、考察されなかった直の形象について考える。二郎が一郎に対して応答する直の「人格」は何を指し、語りのうえでその言葉はどのように機能するのか、ということをも明らかにして行く。

一、『行人』の語り

『行人』は、二郎が大阪に到着する場面から始まる。「友達」三章までは作品内現在の二郎の視点から語られているように描かれる。しかし、「友達」四章冒頭において急遽地の文で以下のように示される。

それは夕方の比較的長く続く夏の日の事であつた。二人の歩いてゐる岡の上は殊更明るく見えた。

（「友達」四）

この一文から、視点人物は二郎のみではなく、二郎と岡田のことを「二人」という人称を用いて語る語り手が存在するということが示唆される。さらに地の文では、「其晩」や「其日」、「其時」といった時制を用いて語られる場面が頻発する¹¹。つまり、『行人』における二郎は主な視点人物ではあるが、二郎の視点を離れて物語を進

行させる語り手が存在することが分かる。また、二郎は、「其晩」「其日」といった指示語で時間を示すことが出来る。現在に存在し、その地点での視点で語ることも可能であることが推測される。

二郎の語りについて、佐藤泉は、二郎が語る「今」＝「象徴的 今」と出来事が起こる現時点としての「今」(＝「その都度の 今」)が両立されている構成であると指摘している¹³⁾。また、「行人」において語られている「盲女」のエピソードについて、駒尺喜美は、「盲女はほとんど彼女の一生をかけて真実を求めてきた。だが人はけっしてそれを与えようとはしない¹³⁾」ことを決定的に二郎に示したと論じている。生方智子は「精神病の娘さん」のエピソードによって「語り手の無意識レベルには 女は何を欲望しているのか、さらには 二郎は何を欲望しているのか」という謎が、語り手の意識レベルには 一郎は狂気なのか という謎が配分される¹⁴⁾と述べている。これらの論に対して、野網摩利子は以下の分析を行なっている。

このように見てくれば、小説内挿話の位置づけも明確になる。それらの話は、登場人物の心理の方向性を決めていくように作用している。一郎は、それらの話を誰よりも真剣に受けとめたがゆえに、その話中の人物が持っていた心理の傾斜が身に付いた。(中略) 諸話の言葉とそれが持っていた心理の時間形式に魅せられた一郎が、しだいにあの切迫した心理と言動を持つようになったのであって、その逆ではない¹⁵⁾。

野網は語り手(一郎・二郎)は語られた話から自身の心理を構成し、彼らもまた、物語を語り出していることに着目している。駒尺は一郎だけを対象にしていたが、野網は二郎も一郎と同様に同様に、自身が語る内容から影響を受けていると論じている。これらの先行研究を下敷きに、本章では、二郎が「語る」時間の整理と、二郎

の「語り」と視点の特徴について述べる。

まず、語り手の時制と 現在 との距離について整理するために、過去における日時について言及したい。次の引用は「友達」の章で三沢と二郎が話す場面である。

「あの女は君を覚えてゐたかい」／「覚えてゐるさ。此間会つて、僕から無理に酒を吞まされた許だもの」
 ／「恨んでゐたらう」／今迄横を向いてそっぽへ口を利いてゐた三沢は、此時急に顔を向け直してきつと正面から自分を見た。其変化に気の付いた自分はすぐ真面目な顔をした。けれども彼があの子の室に入った時、二人の間に何んな談話が交換されたかに就て、彼は遂に何事も語らなかつた。
 (「友達」三十一)

傍線部の「彼は遂に何事も語らなかつた」は、語り手の二郎が三沢と会話していた時間よりも未来にある現在 から当時のことを振り返つて語っていることを示す。「友達」以外の章でも、特徴的な語りが所々に見られるが、二郎が語る「其時」や「此時」は具体的に何年なのか、ということは作品内に手掛かりはない。¹⁶⁾

現在 の視点を持つ二郎の語りはどのような効果を生むのだろうか。次の引用は「帰つてから」二章における一郎の眠りに関する記述である。

彼は聖者の如く只すやくと眠つてゐた。此眠方が自分には今でも不審の一つになつてゐる。

(「帰つてから」二)

この箇所に対応する記述として、Hさんの語りによる『行人』終末の部分があり、そこには一郎が「ぐうぐう寝てる」「塵勞」五十二「る様子が描かれている。しかし、「帰つてから」二章において二郎は一郎の睡眠を「不審」に感じているが、その理由や、一郎が家族の前でよく眠れないという状態が 現在 までずっと続いているのではないか、という疑問を読者に提示する。

さらに、 現在 の二郎とその他の登場人物の関係や距離についても考えたい。以下は 現在 の二郎と重との交流を推測させる箇所である。

自分は今でも雨で叩かれたやうなお重の仏頂面を覚えてゐる。お重は又石鹼を溶いた金盥の中に顔を突込んだと思はれない自分の異な顔を、何うしても忘れ得ないさうである。 (「帰つてから」九)

また、次の箇所は、 現在 の二郎にも分らないことがあることを示している。

けれども書齋に入った彼女が兄と差向ひで何んな談話をしたか、それは今だに知る事を得ない。自分丈ではない、其委細を知つてゐるものは、彼等二人より以外に、恐らく天下に一人もあるまいと思ふ。

(「帰つてから」三十四)

この部分は、一郎と貞が当時のことを話さない、もしくは話せないのではないか、という疑問を読者に提示している。この疑問は、物語全編を通して読んでも「解決」することは出来ない。しかし、前述したような伏線を

張るような語りによって、二郎が示さない（もしくは示せない）ことを想像させられるのである。さらに、連載中断後の「塵勞」においても「帰つてから」ほどではないが、二郎の現在からの視点が見られる。

物語全編を通して、基本的に過去形で語られているが、特に「今だに」「今でも」などの語から、過去完了の視点で描かれていることが分かる。また、二郎が知り得ないことには言及していないことから、語りの視点については「行人」の語りは二郎の視点を通して語られていることが分かるのである。二郎の視点を通して語られていることから、二郎が知り得なかったことは描くことは出来ない。ゆえに、不可視の部分といったものが出来てしまうことに注意したい。

特に多く指摘されてきたことではあるが、二郎は現在、後悔や「懺悔」の念を持って物語を編んでいるようである。⁽¹⁷⁾

自分は此時の自分の心理状態を解剖して、今から顧みると、兄に調戯ふといふ程でもないが、多少彼を焦らす気味であたのは慥であると自白せざるを得ない。尤も自分が何故それ程兄に対して大胆になり得たかは、我ながら解らない。恐らく嫂の態度が知らぬ間に自分に乗り移つてゐたものだらう。自分は今になって、取り返す事も償ふ事も出来ない此態度を深く懺悔したいと思ふ。

（「兄」四十二）

二郎が「深く懺悔したい」と願う対象は一郎であるようだ。この文章もまた、一郎の身に何が起ころうというような語り方をしているが、そのような展開は「行人」を通して読んでも明確には描かれない。しかし、自らの立場を明らかにしない視点人物の二郎が、深い「懺悔」を示していることは注目に値するだろう。二郎の視点を

通して描かれる『行人』において、問題になるのは、「塵勞」におけるHさんの手紙以降である。Hさんの手紙を読んだ二郎は、どのように思考し、行動するのかが描かれていない。二郎のこの「懺悔」の念によって、Hさんの手紙以降は恣意的に描かれていないのではないだろうか、という憶測を与える語りとなっている。また、二郎が和歌山での直の様子について二郎に報告する場面で、あえて「懺悔したい」と記したことで、現在の二郎は直を失っており、それは二郎と直の和歌山行が原因ではないか、という深読みも出来てしまう。

これらのことから、「帰つてから」三十四章の一郎と貞の会見や、「塵勞」のHさんの手紙以降のように、二郎の視点から語られることで、作品内に三人称で語る語り手が存在しても、二郎が関知しないこと、もしくは関知できないことは作品に記されないことが分かる。二郎が知り得ない部分と「懺悔」の念が『行人』に描かれている部分の外側を想像可能にしているのである。以上のことを考慮し、二郎の視点を分析することで、二郎の「後悔」の内実を明らかにする。

二、二郎が見る直

二郎は和歌の浦にて、一郎に「他の心が解るかい」（「兄」二十）と問われた時、「他の心なんて、いくら学問をしたつて、研究をしたつて、解りつこないだらうと僕は思ふんです」（「兄」二十一）と答える。作品内過去における二郎は、他人の心を読むことは出来ないと考えており、また、他人が自分に「本式の本当」を言うこともないと「諦めて」いることが分かる。それに対して一郎は直の「心」を知りたいと願い、二郎に直の「節操を試す」ように頼む。その依頼に窮した二郎は「倫理上の大問題」（「兄」二十五）と述べ、「機会があつたら姉さんに

とくと腹の中を聞いて見る気でみたんですから」とも述べる。二郎は一郎の「発作」を恐れ、「本式の本当」を言う人はいないと思ひながら「腹の中を聞」こうと思つていたのだと咄嗟に応答している。

二郎は母親にも同様の応答をしている。直の態度に苦言を呈する母親に二郎は、「姉さんも遠慮してわざと口を利かずにゐるんでせう」「兄」十三」と「気休め」を言つたと述べる。また、二郎は「其内機会があつたら、姉さんにまた能く腹の中を僕から聞いて見ませう」「兄」十四」と言い切つている。この言葉は「折角斯んな景色の好い所へ来ながら、際限もなく母を相手に、嫂を陰で評してゐるのが馬鹿らしく感」じたゆえに出た言葉である。「腹の中」を知るといふ言葉は、二郎にとつて「馬鹿らし」い話を切り上げるために使つた、いわば方便であろう。さらに二郎は、一郎夫婦の問題について、母を安心させられるのは家族の中で二郎自身であるということを知ることになる。二郎はまた、一郎から同様の相談を持ちかけられたことで直の「腹の中」を知り得る可能性が高いといふ自分の立場を理解するのである。つまり、家族の中で直に本心を聞けるのは二郎のみであるということを感じさせるように描かれているのである。

人の心は分からないと決めてかかつてゐるらしい二郎はしかし、直については「平生こそ嫂の性質を幾分かしつかり手に握つてゐる積であつた」「兄」三十九」と述懐する。二郎のその僻見を破ることになるのは、「行人」における一つの山場でもある、直と二郎の和歌山行である。

自分は嫂の後姿を見詰めながら、又彼女の人となりと思ひ及んだ。自分は、いざ本式に彼女の口から本当の所を聞いて見やうとすると、丸で八幡の藪知らずへ這入つた様に、凡てが解らなくなつた。

（「兄」三十九）

二郎が和歌山で発見したのは、解っていたつもり直の「人となり」さえも、直に近づけば近づくほど解らなくなることであった。しかし、二郎は一郎に直の「本当の所」は「解らな」と報告することはしない。一郎の依頼通り、和歌山で直と一夜を過した後、二郎と一郎は以下のような応答をしている。

「姉さんに就いて……」 / 「無論」 / 「姉さんの人格に就て、御疑ひになる所は丸でありません」

（「兄」四十三）

二郎が発した直の「人格」とは何を指すのだろうか。まず、「人格」という語について考えたい。井上哲次郎の『中学修身教科書』⁽¹⁸⁾に、「人格」について記述されている箇所が存在する。

各人一切の道德は、人格の発表なれば、人格なき人には、道德亦見るべからず、故に人格を陶冶するは、即ち人の徳性を涵養するに外ならざるなり。是を以て人の人格に対する責務は、自己に対する責務中、最も高尚なるものたることを知るべし

「道德」は「人格」の根源であると述べられている。それゆえ、二郎がここで直の「人格」について言及したことは重要であると言えよう。また、二郎が直の「人格」に言及したことで、二郎は直の「最も高尚」なもの、即ち「道德」と「倫理」に触れたのである。このことから、二郎から直の「人格」についての言葉を聞いた後、一郎が「急に色を変へ」たことへの説明がつく。つまり、二郎は嫂の「道德」を擁護するためにあえて「人格」

という言葉を用いたのである。二郎はその時の一郎の様子について、以下のように告白している。

自分は其時場合によれば、兄から拳骨を食ふか、又は後から熱罵を浴せ掛けられる事と予期してゐた。色を変へた彼を後に見捨て、自分の席を立つた位だから、自分は普通より余程彼を見縊つてゐたに違なかつた。其上自分はいざとなれば腕力に訴へても嫂を弁護する気概を十分具へてゐた。是は嫂が潔白だからといふよりも嫂に新たなる同情が加はつたからと云ふ方が適切かも知れなかつた。云い換へると、自分は兄を夫丈軽蔑し始めたのである。 (「兄」四十四)

二郎が「人格」という言葉を用いたのは、一郎に対する「敵愾心」及び「軽蔑」があつたためである。この「敵愾心」や「軽蔑」は、一郎の「癩癩を起し」(「兄」四十三)ながらそれを抑える様子を見、「もう少し待つてゐれば自分の力で破裂するか、又は自分の力で何処かへ飛で行く」と「觀察」し、直のように「済まして」いるのが一郎への適切な対応である、と二郎は理解したからである。二郎が直の「道德」の根源である「人格」に言及したことで、一郎はそれ以上、直の「節操」について訊くことは出来なくなつたのである。また、一郎が本当に知りたかつたのは直の「本心」であり、「道德」ではない。二郎は「人格」という言葉を使い、意識的に一郎の問いをすり替へたのである。これは、直と過した二郎がいくら言葉を尽くしても疑いが晴れないことと同時に、二郎には直の「本心」が分からなかつたからである。

和歌山での一夜の後、二郎による直の「冷淡」というイメージは変化する。直との和歌山での一夜において、直は二郎に「小刀細工」(「兄」三十七)で死ぬよりは「大水」「雷火」によつて死にたいと主張する。また、直

は自身について、「丁度親の手で植付けられた鉢植のやうなもので一遍植られたが最後、誰か来て動かして呉れない以上、とても動けやしません」（「塵勞」四）と、「鉢植」を例に出しながら述べると同時に、「凝としてゐるより外に仕方がない」と自認している。一郎に対しても直は次のように考えているようだ。

彼女の口にする所は重に彼等夫婦間に横たはる氣不味さの閃電に過ぎなかつた。さうして氣不味さの近因に就ては遂に一言も口にしなかつた。それを聞くと、彼女はたゞ「何故だか分らないのよ」といふ丈であつた。實際彼女にはそれが分らないのかも知れなかつた。又分つてゐる癖にわざと話さないのかも知れなかつた。／「何うせ妾が斯んな馬鹿に生れたんだから仕方がないわ。いくら何うしたつて為るやうに為るより外に道はないんだから。さう思つて諦らめてゐれば夫迄よ」／彼女は初めから運命なら畏れないといふ宗教心を、自分一人で持つて生れた女らしかつた。其代り他の運命も畏れないといふ性質にも見えた。

（「塵勞」四）

直は一郎に関して、「分らない」と「諦らめてゐ」と述べている。「動けない」直は「凝としてゐる外に仕方がない」ゆえの苦勞を初めて二郎に打ち明けたのである。二郎と同様に、直もまた、他者を「分らない」、「諦らめてゐる」と語っている。このことから、直の理解者としての二郎といった関係性が浮かび上がる構造になっているのである。

二郎は直を「運命なら畏れない」「凝つとしてゐる」女性として描き出している。また「行人」において直は暴風雨や雨といった自然とともに描出されていることにも着目しつつ、次章以降、二郎の視点を通して、直と一

郎はどのように表現されているのかを考える。

三、一郎と「自然」

一郎は科学の発展について、「人間の不安は科学の発展から来る。進んで止まる事を知らない科学は、かつて我々に止まる事を許して呉れた事がない」（『塵勞』三十二）と述べる。

「止まる事を知らない」科学と同様に、一郎もまた「實際僕の心は宿なしの乞食見たやうに朝から晩迄うる／＼してゐる。二六時中不安に追ひ懸けられてゐる」と自身を評している。一郎の自身に対する「動かないものが懐かしい」という分析はこれらのことを総合して判断したものと考えられる。このことから、一郎の「動かないもの」に対する信頼感や好意が読み取れる。

兄さんの眼には御父さんも御母さんも偽の器なのです。細君は殊にさう見えるらしいので、兄さんは其細君の頭に此間手を加へたと云ひました。ノ「一度打つても落付いてゐる。二度打つても落付いてゐる。三度目には抵抗するだらうと思つたが、矢つ張り逆らはない。僕が打てば打つほど向はリーダーらしくなる。そのために僕は益無頼漢扱ひにされなくては済まなくなる。僕は自分の人格の墮落を証明するために、怒を子羊の上に洩らすと同じ事だ。夫の怒を利用して、自分の優越に誇らうとする相手は残酷ぢやないか。君、女は腕力に訴へる男より遙に残酷なものだよ。僕は何故女が僕に打たれた時、起つて抵抗して呉れなかつたと思ふ。抵抗しないで好いから、何故一言でも云ひ争つて呉れなかつたと思ふ」（『塵勞』三十七）

直を打つたことをHさんに告白した一郎は、抵抗しない直に対して「僕は何故女が僕に打たれた時、起つて抵抗して呉れなかつたと思つたようである。一郎は、「二六時中不安に追ひ懸けられてゐる」自分に対立するものとして「動かないものが恋しい」と述べ、「進んで止まる事を知らない科学」によつて人間は不安になると論じる。この論理の過程は整然としており、筋が通つてゐる。一郎にとつて動くものと動かないものとはそのまま、安定しているものと不安定なものとの構図にあてはまるように考えられる。しかし、直に対してだけは、怒る一郎自身と同じように「抵抗」や「云ひ争つて」欲しかつたと吐露する。そうすることが人間の本質であるとい一郎は考えており、そうしなかつた直は、一郎に「偽の器」という認識を深めることになつたのであるが、一郎が知りたいのは、Hさんへの「君の心と僕の心とは一帯何処迄通じてゐて、何処から離れてゐるのだらう」といふ言葉の通り、他人の「心」であり、直を打つことでそれを知ることが出来ないはずである。しかし、一郎は直を打たざるを得なかつたのであり、ここに、一郎の身体と論理の乖離が見られる。また、一郎はアレパシーにも傾倒するが、自分の肌の痛みを重も感じるか、という実験をしていた。人の心を知るためにまず身体感覚を用いて確認しようとしたのであり、身体と論理を統合しようと努める様子が表わされている。安倍能成は「自己の問題として見たる自然主義的思想」において、次のように論じている。

我等の科学的知識は精確でなくて、我等が科学的精神の影響をつけて居ることは事実である。科学的精神が我等に与へたものは、物質的世界観人生観であつた。(中略)我等の経験には精神よりも物質の方が有力になつた。精神的事物よりも物質的事物の方が、より多く現実になつて来た。我等が沈思し、瞑想し、感慨する所を空と見、無力と見、偏に我等が見、聞き、嗅ぎ、触れ、味ふ所のものを確實なりとするに至つた。

かくてこの世界をば大いなる物質の盲動と見る器械観的の傾向が我等に生じ、人間が人間自身を見て、精神的にとよりは、生理的、物理的一言には物質的に見て来だした。⁽¹⁹⁾

一郎の感じる身体と論理の乖離はこの時期の「教養派」と呼ばれるグループやその周辺に近いものがあると考えられる。身体を「器」として見、精神や論理との乖離を訴え続ける一郎は、人の「心」や「本心」ともいうべきものを摸索している。Hさんもまた、一郎について「兄さんは自分の身軀や心が自分を裏切る曲者の様に云ひます」（「塵勞」四十六）と記している。一郎は「絶対の境地を認めてぬ」（「塵勞」四十五）ながらも、人の「心」や身体は変化してゆくこともまた十分に理解していると考えられる。そのうえで身体が論理に追いつかない、もしくは論理が身体に追いつかない矛盾した感覚を一郎は抱えているのである。

先に述べたように、二郎の視点で見ると直は「凝つとして」、自然と共に死にたいと願う女性として語られている。対して一郎は、直を「抵抗しない」「逆らはない」女性と認識しながら、直に「絶対の境地」である「心の落ち付き」を認めていない。ここに二郎の、一郎に対する批判が見られるのである。

「行人」内における二郎の視点は「後悔」を纏いながら、中立の立場を保持し、語っているようではあるが、二郎の、一郎への批判は直の形象を通して明確に描かれているのである。ここに、物語終盤において二郎に代り、Hさんが手紙という媒体を通して語り手に成り代わった理由が分かる。Hさんは一郎の話の中に「暗い奥には矛盾」（「塵勞」五十一）があることを察知しながら、「親しい性質」（「塵勞」四十六）のために一郎を「敬愛」している。二郎は矛盾や批判を「後悔」ゆえに隠蔽した語りをしているのであり、そのような視点を持つ二郎は、一郎の懊悩それ自体を一郎に近い人物であるがために見えぬ、または分からない人物として形象されている。

そのため、長野家に無関係なHさんの視点によって一郎を見ることでしか、一郎の懊悩を描くことが出来なかったのである。

二郎からHさんへ視点が移動したことで、二郎は一郎の悩みを見出すことになるのだが、一郎が直について言及する際に、自身を「人格の墮落」という言葉を用いて評していることもまた、二郎はHさんからの手紙を読むことで知るのである。二郎が想像する以上に、一郎は「人格」の語を烈しく受容したようである。二郎が直の「人格」を保証したために、一郎は自身の「人格」を意識せざるを得なかったように二郎は受け取ったのではないだろうか。ゆえに、二郎は作品内で「人格の出来てゐなかつた当時の自分」（「兄」四十三）と過去の自分を評価しているのである。

直に「同情」し、一郎を批判、「軽蔑」した二郎は、直の「人格」に問題をすり替えることで、一郎からの問いを避けるのだが、「人格」という語を使用したことで、一郎の懊悩を一層深くしてしまったことに気付くのである。

おわりに

『行人』の主な視点人物は二郎である。まれに地の文において、語り手による三人称の語りや、三沢の視点が見られる箇所もあるが、基本的には二郎の視点から見たり、聞いたたりしたものを「自分」という一人称で語り、作品を展開させている。『彼岸過迄』の敬太郎と語り手の関係よりも二郎が主体となっていることが理解できる。また、二郎の視点人物であるという意識や記録する意識を高めたのが『心』の「私」である。『彼岸過迄』の敬

太郎は受話器を耳に当てるのみの「聴き手」であったが、二郎は作品冒頭の三沢との連絡の齟齬に暗示されるように、二郎が行動することで他者とコミュニケーションをとることで作品が成立している。「心」の「私」は先生や静とは血縁関係がないが、それゆえに赤の他人とは思えない敬愛を抱いている。二郎は長野家の一員であり、そのために一郎や母、直との複雑な関係が描かれている。換言すれば、二郎は長野家に生れたために一郎たちに関わっていかねばならないのであり、二郎は「解らない」態度をとることで問題を回避しているのである。そしてそれは、二郎が下宿しても変わらない。血縁関係があるからといって、コミュニケーションが成り立つとは限らないことを、二郎はその視点から描き出している。

「解らない」と述べる二郎はしかし、現在において、後悔を滲ませている。それは二郎が発した「人格」という語に起因するようである。「行人」では「人格」の語の連関によって、二郎直一郎という三人の関係が描かれている。⁽²⁰⁾「解らな」かった過去の二郎が、「解らない」ゆえに問題を回避しようとする。現在まで影響している、ということが窺えよう。また、二郎の「後悔」は過去の自分が軽率に発した「人格」に端を發し、「人格」の語の連鎖は、「行人」の語りの上で、二郎の「懺悔」を読者に印象付ける役割を持っていると考えられる。「行人」は一郎と直の物語だけではなく、二人を観察し、現在において内省する二郎の物語でもある。つまり、二郎は「行人」の中の一視点人物としてだけでなく、物語内部に深く関わっているのである。「行人」のHさんの手紙を読んだ二郎の心境の変化は、物語の断絶のために描かれていない訳ではない。二郎の言葉によって「行人」の中で描かれているのである。

『行人』本文引用について、決定稿を『漱石全集』八巻（岩波書店一九九四・七ノ尚、底本は初出『東京朝日

新聞「一九二・一二・六」一九一三・四・七、一九一三・九・一八、一一・一五」とし、本文引用は決定稿による。但し、旧漢字は適宜新漢字に改め、振り仮名は省略した。引用文中の傍線は引用者による。また、「/」は改行を示す。

注

- (1) 佐々木雅彦「夏目漱石」「行人」をめぐって」(『国文学解釈と鑑賞』一九六九・一二)などがある。
- (2) 江藤淳『夏目漱石』角川文庫、一九六八・七
- (3) 例を挙げると、片岡良一「行人」(『夏目漱石の作品』厚文社、一九五五)、小宮豊隆『漱石全集第一巻』解説(岩波書店、一九五六)などがある。
- (4) 前註3に挙げた小宮豊隆『漱石全集第一巻』解説(岩波書店、一九五六)。
- (5) 橋本佳「行人」について」(『国語と国文学』一九六七・七)
- (6) 伊豆利彦「行人」論の前提」(『日本文学』一九六九・三)
- (7) 山尾仁子「夏目漱石」「行人」論——構想の変化について——」(『叙説』一九卷、一九九二・一二)
- (8) 重松泰雄「行人」の主題 とくに 二郎説話 の意味するもの」(『国語と国文学』四七卷九号、一九七〇・九)
- (9) 佐藤泉「行人」の構成——二つの 今 二つの見取り図」(『国文学研究』一九九一・三)
- (10) 平岡敏夫が「行人」その周辺」(『国語と国文学』四九卷四号、一九七二・四)において最初に貞と二郎の間の愛を指摘し、秋山公男が「行人」の構想と構造——一郎・お貞の位相に関する一考察——」(『国語と国文学』五六卷一〇号、一九七九・一〇)でより詳細に分析した。
- (11) 例を挙げると、「其晩はとう／＼岡田の家へ泊つた。」「友達」五)や「其時はたゞお兼さんに気の毒をしたといふ心丈で、お兼さんの赤くなつた意味を知らう抔とは夢にも思はなかつた。」「友達」六)、「其日は自分に取つて、何だか不安

に感ぜられた。」(「兄」十七)「其日程落付かない事も亦珍らしかつた。」(同)などがある。

(12) 佐藤泉「『行人』の構成——二つの今 二つの見取り図」(『国文学研究』一九九一・三)

(13) 駒尺喜美「『行人』論——到着点と出発点と——」(『漱石 その自己本位と連帯と』八木書店、一九七〇・五)『漱石作品論集成』九巻、桜楓社、一九九一・二)

(14) 生方智子「歌私的里者のディスクリブル『行人』の語りと構成」(『漱石研究』一五号、翰林書房、二〇〇二・一〇)

(15) 野網摩利子「夏目漱石『行人』における、心理の時間形式」(『文学』一四巻六号、二〇一三・一一)

(16) 須田喜代次は「『行人』論(1)——新時代と『長野家』——」(『大妻国文』一九八九・四)の中で『行人』作品内現在を「明治四十二年以降の明治『四十何年』」と述べている。

(17) 一例を挙げると、佐藤勝は「作家の論理と小説の論理——『行人』論」(『国文学解釈と教材の研究』二一巻一四号、一九七六・一一)の中で「『取り返す事も償ふ事も出来ない』ゆえの『懺悔』の意志を持つ二郎は、明らかに当時の二郎から大きくへだたっている」と指摘している。

(18) 井上哲次郎『中学修身教科書』(金港堂、一九〇二)

(19) 安倍能成「自己の問題として見たる自然主義的思想」(初出「ホトトギス」一九一〇・一、『日本近代文学大系』五七巻、角川書店、一九七二・九)

(20) 森田草平は『続夏目漱石』(養徳社、一九四三・一一)において、「煤煙事件」の後、漱石から二人の関係は「恋愛」ではなく「遊びとしか思はれない」と評されたようである。それに対し森田は、相手と「恋愛以上」の「人格と人格との接触」を求めていたと主張したが、漱石は「男女両性が人格の接触到の結合を求めるのに、恋愛を措いて他に道があるものか」と応答したようである。